

# 泉丘高1年生

# 世界へ

泉丘高の1年生グループが、米コンピュータ大手「ヒューレット・パッカード」など主催の都市計画コンテスト「火星100万人移住計画」の日本大会で東大生チームをしのぐ3位に入り、世界大会進出を決めた。101チームが出場した第1ステージで、コンパクトシティと太陽光電池の独創的な提案が評価された。次戦で発表する計画の3次元(3D)画像を制作する石川の若い頭脳が、世界の舞台に向けて知恵を絞っている。

「プロジェクトマーズ」と名付けられたコンテストに出場したのは物理部の酒井諒太さん、松本拓海さん、松本悠次さんと有志で参加した谷口千尋さん、長谷川愛さんの5人。コンテストでは、100万人規模の火星移住という人類の新たな挑戦を想定し、インフラの設計に取り組んだ。

「人工時差」と省資源  
5人が通過したのは世界各地で開催され、都市の基本コンセプトを発表する第1ステージ。昨年12月に都内で開かれた

## 火星移住計画コンテスト



世界大会に向け、グループで考えた火星移住計画の3D画像を制作する生徒  
—泉丘高

日本大会では、大学生や大学院生のチームを中心に計9チーム

が代表に選ばれた。5人は、大会の開催を知って興味を抱き、昨年10月から準備を始めた。物理部顧問の前田学教諭の指導を受けた計画は、「人工時差」でグループに分かれた世界の移住民が生活リズムをずらして共用する都市と、効率的な電気エネルギーの供給をコンセプトとした。

移住民は、人工的に昼夜を生まみ出す居住スペース6カ所と、中央に公共スペース1カ所を持つビル型都市で生活する。居住

## 東大生らしのぎ日本3位に

スペース3カ所に8時間ずつの時差を設け、24時間稼働する学校などの公共施設を共用することで、施設の重複を減らし、省資源につなげる。

都市に必要なエネルギーは、球形の電池を使った太陽光発電パネルを松葉のように棒状に配置することで、光の角度の影響を受けず高い発電効率を維持できるシステムを提案した。5人の発表は審査員の注目を集め、会場では次々と質問が寄せられた。

2月26日締め切りの第2ステージでは、世界各地の代表チームがモニター上で360度から確認できる3D画像を制作し、都市コンセプトを発表する。4月の最終ステージに進んだチームは、都市コンセプトをVR(仮想現実)で表現し、都市生活を体験できるような映像を披露する。

高評価ならゲームに

最終ステージで高い評価を受けた計画は、大会協力企業が米航空宇宙局(NASA)の調査に基づいて制作するVRシミュレーションゲーム「マーズ2030」に取り入れられる。

泉丘高の5人は現在、パソコンソフトでコンセプトの3D画像の制作を進めている。リーダーの酒井さんは「メンバー全員で意見を出し合い、世界大会で賞を勝ち取りたい」と意気込んでいる。